



「自分の頭で考える力」が 日本の成長戦略のカギを握る (終)

(株)人間と科学の研究所所長 飛岡 健

⑥コミュニティの再構築 ―少子高齢化社会への対応―

今日の日本社会は、人口減少が進み、一方で都市化する中で、農村地域のコミュニティを崩壊させるとともに、都市社会でもコミュニティの形成を行なえていない。そのことにより、社会的孤立感を一人ひとりに強めていると同時に、それにより社会的問題を解決できなくなったり、新たな問題が生じたりしている。何よりも、これからの日本にとって最大の問題の1つは、人口減少の中の少子高齢化である。

このようなトレンドの下に、若い人個々の負担が極限状態にまで高まることが予想されるのが、今後の日本社会である。1人つ子同士の若い夫婦の2世帯家族では、子供とともに、両親とその両親、すなわち祖父母を合わせて数人の老人の面倒を、子供とともに見なければならぬ。これでは全く生活が不可能になってしまう可能性が高い。それ以外にも多くの問題が予想される。

この状況の改善には、何よりも家族単位の生活から、複数家族のコミュニティの形成へと移行することが

必須だろう。例えば、老夫婦の片方が、寝たきりになった時に、その相方は24時間の看護体制を余儀なくされる。これでは介護疲れで参ってしまい、そこまで至らなくても精神的にかなり追い込まれてしまい、まともな生活を送れなくなってしまうケースも多々ある。

そうした状況の改善には、やはりコミュニティの創造が重要である。

例えば、10家族が共同で、老人介護を一緒に行なうことになれば、すなわち、お互いの家族を交互に面倒を見るということを考えるならば、家族は、1週間に1日くらいは、介護から解放されることも可能であろう。しかも10家族の中には、得手不得手があるので、アダム・スミスの分業論のごとくに考えることで、全体として効率のよい介護システムの選択肢が広がることになるだろう。実はコミュニティの創造は、介護問題のみでなく、地方文化の創生、あるいは環境問題への対応、地方での教育など、多くの問題にとってのインフラを整備していくようなものである。まさにピンチをチャンスに変える時が来ているのである。

今日の人口減少と少子高齢化を

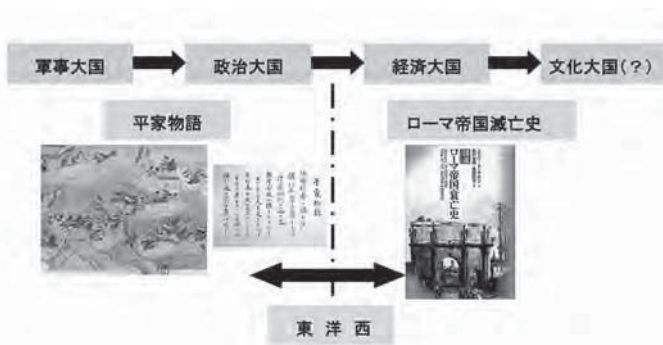


図1：女性の時代の次に来る時代

契機として、日本社会全体として一人ひとりの人間が、「家庭人、地域人、社会人」の三位一体を担えるようにリデザインするのである。それにより今日抱えている多くの問題の解決の努力の場が形成されるようになる。

そのためためには、いま一度人間主義日本人を考え、どういう住環境や、ネット環境を作るべきかを総合的に考えていくことが重要である。

日本人の元々持つチームワークを真に発揮できる社会システムを真剣に考え、至急に再創造していくことである。

⑦ 女性の歴史的挑戦の時代との認識を！

ー世界史を越えてー

世界の歴史を通して、圧倒的に女性性が社会の前面に出て、社会を統括して成功した事例は極めて少ない。イギリスのエリザベス1世の頃の治世は成功例と歴史家は評価するが、その頃の社会システムは王政が形成されていたからであり、今日のドイツのトップとしてのメルケル首相はどのように今後ドイツ全体において、女性の時代を構築し、やっていくのであろうか。メルケル首相が女性重視の社会を考えているわけではない。まさに、女性の時代の真の成功例は、今までの時代にはほとんど見られなかった。しかし、今日世界中で女性の活躍の時代に入ってきているが、世界的に見た時に、女性がトップになって、発展・成長していったケースは、ほとんど見られないのである。一部の女性の活躍は別である。国全体としての女性の時代は、

ほとんど見られなかった。果たしてそれは女性の限界なのか？ それとも女性の社会的経験不足からなのか？ その意味で今日の女性の社会進出による女性の時代は、壮大な歴史的挑戦なのである。

ところで、次の点の認識は重要である。それは日本の国の変化のパターンが、木村尚三郎氏によつて、「女時、男時の交互到来」として捉えられたことである。

そこでは、海外から新しい文化や組織、制度に関してのさまざまなものが輸入される男の時代と、男の時代に輸入されたものを、日本的に発酵させ、よりよい物に品質改良としてしまう女の時代とが交互に訪れて来ているという指摘であった。

まさにそこでは、常に女の時代の次に男の時代が来ているのであるが、女の時代と言つても、そこでは男性が全体社会を引っ張つていつているのである。ここで語らんとしていることは、『平家物語』が示すように、「女官の時代」になると、男が弱腰になり、富士川の合戦において、水鳥の羽音を聞いて、敵軍襲来との錯覚の下に退避して敗れてしまう指揮官であつた平家維盛のような武将

が増えってしまうことである。

それはギボンの著した『ローマ帝国の滅亡』の中で語られるように、時代は、軍事・政治・経済・文化と動く中で、ローマは経済大国まで行つたが、文化人が育たず、ギリシャの文化人に思いを馳せるローマの女性が増え、それにより、ローマの武将は付け焼刃のように、文化のトレーニングをしたが、身につかないとともに、弱腰の武将となり、結果的には自らの国内の問題の強まりと、周辺からの敵の攻撃により滅びていつてしまうのであつた。

そうした歴史の教訓の下に、今日の「女性の時代」は、どこに向かつて進んでいるのか？ 明らかに女性が文化のみでなく、政治、経済にも入っているのが今日である。果たして、壮大なる実験に成功して、真の女性時代が到来するのであろうか？

⑧ 首相や政治家、教育者の育成を国民が考えるべき！

ー評論家から養成者にー

今日の日本の姿を見ると、一億総評論家どころか、一億総裁判官とも、一億総探偵とも言える状況が到来している。マスコミにおけ

るニュース解説番組などを見ていると、反強者番組が圧倒的に多く、弱者の味方のように振舞ったり、やたら国民や視聴者とか、読者という抽象的言葉を登場させ、それが正義のごとく報道している。

しかし、どう見ても、弱者を保護するのは強者であり、強者の存在があつてこそ、弱者の生存は保障されるのである。マスコミは実は視聴者の代表ではないのに、その振りをしているところに大きな問題がある。マスコミは「第四の権力」と呼ばれる程力を持つが、本来は1つの事業セクターに過ぎないのである。その錯覚が、メディアと視聴者の両方にあることが問題である。

何よりも、日本国民の多くは、自らのリーダーである「首相」や政治家に具体的イメージを形成しておらず、「強いリーダーとしての首相」の存在がいかに重要であるか」に関しての合意形成ができていないし、自らのリーダーが強力な存在として育つていくことを願う意識が欠如しているのが現状である。プーチン露大統領や習近平中国国家主席のような、体制の違う国家の元首と同じことは望まないが、

日本のトップが世界の中で尊敬され、頼られる首相になつてもらうことが、日本の将来にとって極めて重要なのである。そのためは、国民の意識を変えねばならない！ 何か一端大災害や大事故が生じると、ほとんど国や、公を頼る割には、その国や公に対しての普段から意識が極めて薄い(弱い)のが日本人である。

私は、今の日本では「異端」と称されるかも知れない考え方の持ち主であるが、一国の首相たるものが、自分が必要と思う大学を1つくらい勝手に作つてもよいと考える立場である。もちろん、「必要であるとの強く、正しい認識」を持つことが前提で、そして自分の周りにいる信頼できる者に、それをやらせても、そのくらいはよいと考えるのである。

ところで、今日のマスコミや、国会で騒いでいる森友問題は、警察に任せておけばよいし、加計学園に関しては、文科省と今治市と加計学園に任せておけばよいと考えるのである。マスコミが長時間かけて報道する内容でもないし、国会で揚げ足を取つて得意げに論争する問題でもないのである。

実際その間に、北朝鮮はミサイル

型の核爆弾を開発し、ICBMを成功させてしまつてゐる。さらに、日本には自力で対応するための法律もなければ、その暴力装置もない。従つて国際協調の下に、話し合いや経済制裁によつて北朝鮮の暴走を止めようとしているが、結果的にはほとんどその努力の成果はゼロに近く、北朝鮮の暴走を許してしまつてゐる。

おそらく北朝鮮の暴走を許して来たことに関して、マスコミの責任という形での総括は行なわれないであろう。マスコミには自らの反省機能は、実質的にないに等しいのである。

それのみか、相変わらず政府や首相、関係者のあげ足をとつて、センセーショナルに騒ぎ立てるのみである。それはジャーナリズムでなく、センセーショナルリズムである。今行ふべきことは「明日の日本の姿、形」を万機公論に決するべく、マスコミが国民の合意としての明日の日本の姿、形を描像していく努力を行なうべきであらう。

つまらないあげ足取りに有限な時間を費やすのでなく、もつと真剣に我々の子孫達のために、長期的視点に立つて、その繁栄を考えるための真のマスコミ的努力を行なうこと

である。そのためにも、国民として世界的なリーダーとしての日本の首相をどう育てていくのか? を考えるべきなのである。つまらぬことで、あげ足を取つてばかりいるのではなく、国民一人ひとりが、日本の将来のために、強い首相を育てる努力をしていくことである。と同時に政治家に関しても同じである。

そのためにも、国民一人ひとりが、首相像、政治家像をもつとしっかりと捉えなければならぬし、国家の役割についても、もつと頑とした認識を持つべきなのである。さらに今日の先生に対しても同様である。昔はコミュニティとして立派な先生になつてもらふべく、先生を応援していたが、今日ではモンスター・ペアレントを始め、先生に委ねることより、批判することばかりになつてゐる。これも変えていかねばならない。

⑨ “脳業” 社会到来の認識とそこでの戦い方

IAI、ロボット、IoT

最後に、これからの日本の将来を考えるに際して、前述のように、今日が第四次産業革命に突入しており、脳業社会に入つていて、そこで

は従来の工業社会、情報社会と総ての面において大きく内容が変化して来ていることを強く認識せねばならないことを指摘しておく。

農業 (Agriculture)

<今までのノーギョウ (農業)>

<二つのノウギョウ>

脳業 (Brain Work)

<情報化時代のノーギョウ (脳業)>

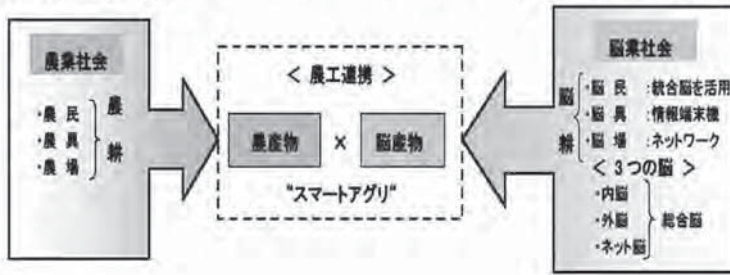


図2：二つの「ノウギョウ」（農業と脳業）

例えば、防衛に関しても、従来の陸海空での戦いから、今や宇宙、そしてサイバースペースでの戦いに突入しており、軍備も人員も大きくその変化に合わせて変えねばならなくなっている。同様にビジネスにしても、前述のごとくライフログとビッグデータ化し、それを高度に集め、AI（人工知能）などを用いて、高度のデータサイエンスを展開して行く企業が力を増す。また、さらに流通業でも通信販売の比重が著しく増している。

そうした時代変化を正しく把握して、対応へのスピード感を持つことが、これからの国家・自治体の経営でも、企業、組織、経営でも不可欠である。総ての分野において、新しい経営者や指導者が求められ始めているのである。何よりも、新しい経営者や指導者は、第四次産業革命と脳業社会全体像の特質をよく理解しておかねばならない。

第四次産業革命と脳業社会の急激な発展の姿を正確に捉え、新しい時代への対応をしっかりと行なわねば、日本の経済は世界の中で、相対的に著しく低迷していくことになるであろう。以下で第四次産業革命

の概略と、脳業社会に關しての説明をしておく。

第四次産業革命とは、第三次のC&C革命に加え、センサーの著しい発達に加え、マイクロモーターや機能性繊維のようなコントロール素子や、素材の発達により、全体として「センサリング」＋「コミュニケーション」＋「コンピューティング」＋「コントロールリング」の組み合わせが高度化して行く。その4つの頭文字を併せて、「SC3革命」と呼ぶ。結果として、IoT（モノのインターネット）が高度に活発になる。それが第四次産業革命の実質である。

そして、従来の農業に加えて、新しい「脳業」が活発になり、「脳民」が「脳具」を「脳場」で用いて、「脳耕作業」を行ない、「脳産物」を生み出して、勝負する時代の到来である。そして、これを「脳業社会」と表現する。音韻的には、農業社会と一対一の対応が取れる。何よりも、これからの時代は、「二つのノウギョウ」が大事であるし、農工連携のように、両者の協力が不可欠なのである。

こうした第四次産業革命のもたらす脳業社会での戦い方は、何よりも

データをできる限り集め、それらを解析して、脳産物としてのソリューションを導けることが戦いの根本となる。まさにビックデータの集積と、AIの高度活用・解析が総てのビジネスや、社会での営為のベースとなる時代なのである。そのために、スーパーコンピューターに関して、世界的優位性を確保し続けねばならない。

終りに

ここでは、今日の日本の捉える大問題を示し、そのために何をなすべきかを概括的に提案している。だが、この論議の背後には、莫大な調査、研究があり、それらを一つひとつに關して、もっと精緻に論議できるが、紙面の制約もあり本質を概括的に表現するのに留める。

誌面が許せば、これらの一つのテーマに關して、詳述していく予定である。

何よりも今日の日本は「成熟社会」としての認識を忘れ、新しい成長時代に入っているとの認識を持ち、そこでの成長戦略を考えることが不可欠であることを、最後に繰り返しておくことにする。(了)